

## さぼっているわけではありません

副住職の秋田光軌です。先月、お盆棚経を無事に終えることができました。普段は應典院にいたことが多く私にとって、棚経は檀家さんとお会いできる貴重な機会です。限られた時間ですが、求められればできるだけことばを交わすことを心がけています。

その中で、毎年心にのこる印象的な会話があります。今年はある方がこんな風にお気持ちを語られました。「足が悪くて、外出することができない。子どもたちは別のところに住んでいるし、仲の良い友人たちも亡くなってしまった。毎日家に一人きりでいて、このまま生きていて何か意味があるのだろうか…?」と。ぼつりぼつりと苦しみを漏らされる、その口調は切実そのもので、とても考えさせられました。

仏教とは、人が生きる上で味わう苦しみに対処する実践といえます。有名な四つの苦、すなわち「生老病死」だけでなく、愛する者と必ず離ればなれになる苦しみ、嫌な人に出会ってしまう苦しみ、求める物が得られない苦しみなど、こういった苦の分類には普遍的なリアリティがあります。お釈迦様は、苦の原因として人間の煩惱や執着があることに気づき、瞑想などを通して原因を取り除くことで、苦しみにとらわれない悟りを開くことができるという教えを伝えました。

一方、浄土宗の極楽浄土の教えは、お釈迦様の教えとは、一見似ても似つかないものを感じられます。しかし、それもまた、人が苦しみに対処する実践であることに違いはありません。私たち「凡夫」には、煩惱や執着をきれいに取り除くことなどできない。そうした自身の愚かさを深く見つめ、お念仏を声に出して、阿弥陀仏に全てをお任せしていく。これは誰にでも実践可能ですが、決して簡単なことではありません。厳しい修行のイメージとはかけ離れていますが、浄土宗は修行を放棄して、さぼっているわけではないのです。お念仏とは、煩惱や執着を徹底的に見つめ、他者にお任せするという仕方です。苦しみに対処する実践であり、いわば「誰にでもできる修行」なのです。

宗教は何のためにあるのでしょうか。亡くなった大切な方を供養することも、もちろん大切な役割のひとつ。しかし、そもそも宗教とは、人間が「よく生きる」ためにつくりあげた文化なのだと思います。浄土宗と仏縁を持たれた皆さんには、ぜひそれぞれの生の只中で、「誰にでもできる修行」に動んでいただければと念じています。

南無阿弥陀仏。



——大蓮寺とのご縁、はじめの印象はいかがでしたか。

野村・戸田「幼い頃より、祖父や父を通じてご縁をいただいていたので、ごく自然に慣れ親しんでおりました。お寺といえばここ、という印象です。今のご住職が小学生のとき、先代と一緒に勤めに来られていました。私たちも住職と同年代ですので、数珠をもつてうしろに並んでいたのを覚えています。それから50年以上のお付き合いですね。」

——お父様を亡くされて、お檀家さんとして心境の変化はおありでしたか。

野村・戸田「父が亡くなるちょうど一年前、本人の意向でお墓を新しくしました。墓石や色、背丈など、父なりのこだわりがあって、自分のいずれ向かう場所を整えておく、ということだったんでしょう。今

ごろ満足していると思います。私たち、娘しかおりませんので、王子家は続いていきません。ただ野村家のお墓も王子家の隣にあれば、次世代の子どもたちが、これからも王子家のお墓に詣ってくれる。そう考えて、隣の土地を提供していただきました。」

——先日初盆を迎えられましたが、どのように感じられたのでしょうか。

野村・戸田「これまでお盆の準備は祖母や父に全て任せてきました。指示されたことはやっていたのですが、いざ自分で準備するとなると、お膳の並べ方だったり、頼りないところがたくさんあって…。分からないところは住職にどんどん質問させていただきました(笑)。断片的な記憶だったのが、はじめて流れとして理解できた気がします。」

——ありがとうございます。最後に、これから大蓮寺に期待していることを教えてください。

野村・戸田「檀家制度が伝統としてありますが、現代は少子化でもありますし、家というものが前提でなくなってきています。たとえば単身者の方や、私たちのように『娘しかいないから…』という不安を抱えている人もいます。そんな人でも、お寺とのご縁は続けていける。そういう情報を発信しつづけていただけたらありがたいです。應典院の活動もありますし、伝統を受け継ぎつつ、新しい道を行くお寺であってほしいと願っています。」

## 次世代として伝統を受け継ぐ。

野村 あけみさん  
戸田 まゆみさん (大阪市在住)

野村さん、戸田さんは、以前から大蓮寺のお檀家さんである王子家の娘さん方です。今年初盆を迎えられたお父さまの真作さんには、檀家総代もお務めいただくなど、長年にわたって深いお付き合いをさせていただきました。代替わりをされて、どのような変化があったのでしょうか。大施餓鬼会の折りにお話を伺いました(文責／編集部)。





basic information

# 仏女、寺庭婦人を知る

住職の妻として、陰に陽にお寺を支える寺庭婦人(じていふじん)。その活躍に込めた思いが、ナカムラの胸中に響きます。

